イスラエル考古学研究会

ニュースレター

No. 3

2007 年 2 月

テル・レヘシュ第２次調査をむかえるにあたって

置田　雅昭

（テル・レヘシュ発掘調査団団長）

テル・レヘシュ第２次調査を 2006 年８月に実施するべく準備をすすめていた７月中旬、イスラエル軍がレバノンに侵攻したとのニュースが世界を駆けめぐった。情勢が悪化するにもかかわらず、渡航自粛勧告も出ないので、調査団では情勢を見守りながら粛々と作業を進めた。私は遺跡探査の仕事をするために７月 26 日夕刻に天理を出発し、27 日朝、宮崎に到着した。朝刊はイスラエル軍が国連のビルを攻撃し、４名の死者が出たと報じていた。「まずいことになった」というのが直感であった。イスラエル軍は３日戦争や、６日戦争に代表されるように、短期決戦を常套手段としている。そのうち戦闘が収まるだろうと高をくくっていたからである。

天理では調査団のメンバーが緊急に集まり協議してくれた。東京とも連絡を取り、今夏の調査中止を決定したとの連絡があった。「やむを得ないだろう」と同意するほかなかった。次々と新聞社から問い合わせの電話がかかってくる。奈良へ帰ってから知ったのだが、「イスラエル発掘調査中止 天理大、情勢悪化受け」奈良版トップ記事で報道する社もあり、関心の高さがうかがえた。

レヘシュ遺跡はアメン・ホテプ２世（前 1425-1401 年頃在位）が遠征した都市の１つアナハラトではないかとされている。また、19 世紀末に発見されたアマルナ文書（アメン・ホテプ４世・前 1353-1337 年頃の在位時代）にはアナハラトに言及した文字資料はないが、最近の研究で粘土板の幾つかが、レヘシュ遺跡近くの粘土を用いたものであることが明らかにされつつある。それは粘土に含まれる微量元素の含有量から判明したことである。つまり、レヘシュ遺跡近くから発信された手紙がエジプトに届けられたことを意味する。

第１次調査では後期青銅器時代から鉄器時代の土器や、ローマ時代の生活道具が出土した。以前に行われたアメリカ人による遺物採集作業では中期青銅器時代の土器も多数確認されている。従って、レヘシュ遺跡はエジプトと下ガリラヤ地域に密接な関係のあったことを示す都市であることは間違いない。遺跡からはキプロス・ギリシャ系の土器も出土している。そこで来年度の科学研究費の申請にあたって、携帯式の小型蛍光Ｘ線分析装置を購入すべく予算申請してある。07 年３月実施の第２次調査で

ニュース　第１ページ　　毎日新聞　（第3種郵便物認可）

天理大がイスラエル調査中止

旧約聖書関連の都市遺跡　レバノンから50キロ

2006.7.28 毎日

停戦の

テル・レヘシュ遺跡は、レバノン国境から南に約50キロ。だ円形（長径約350メートル、幅約260メートル）の丘状の遺跡で、高さは約35メートル。レンガ積みの住居が何度も建て直されているとされる。一帯は旧約聖書の「ヨシュア記」に登場するイッサカル族の土地で、遺跡は都市「アナハラト」の可能性があるという。エジプトの古文書には、アナハラトは紀元前1300年ごろに、エジプトのトトメス3世が征服したとの記述がある。

計画では立教大、慶応大などと調査団を結成し、約4年かけて調査。今年3月には予備調査を実施し、8月から調査を本格化させる予定だった。ところが今月のイスラエルのレバノン南部攻撃後、ヒズボラがイスラエル北部にロケット弾攻撃を開始。遺跡周辺にもロケット弾攻撃を受ける危険性が出てきた。当面は停戦の見込みがなく、8月に戦闘がエスカレートする可能性もあるとし

・レヘシュ遺跡（紀元前3000年）を決めた。イスラエルのレバノン教シーア派民兵組織ヒズボラのと判断した。

毎日新聞 06 年７月 28 日の記事

は、どの地域を発掘すればアマルナ文書時代の遺物が出土するかを明らかにし、第３次調査に備えたい。もう一つの大きな目的はエン・ゲブ遺跡の発掘でかなわなかった城門の発見である。こうした目的が達成されるためにも、イスラエル国内情勢の平穏を祈りたい。

第２次調査でも、コハヴィ先生、イツィクさん、ニルさん、作業員のケファル・ミスル村の青年達と再会できるのが楽しみである。

（天理大学教授）

□ 第４回イスラエル考古学研究会・報告 □

2005 年 12 月 23 日 (金)

於：北野南部会館 八王子市

桑原久男（天理大学助教授）

「エン・ゲヴからレヘシュへ」

宮崎修二（立教大学講師）

「レヘシュとアナハラトの同定について」

月本昭男（立教大学教授）

「古代イスラエル・イッサカル部族史」

□ 第５回イスラエル考古学研究会・報告 □

2006 年 10 月 14 日（土）、第５回イスラエル考古学研究会が同志社大学・今出川キャンパスにある寒梅館の６階会議室で開催された。５つの研究発表がなされ、活発な質疑応答が行われた。研究会は午後２時に始まり、途中短い休憩をはさみ、午後５時 20 分に終了した。今回の研究会参加者は、会員が 16 名、非会員が６名であった。会場となった同志社大学の学生も多く参加し、イスラエル考古学についていろいろと学ぶことができたようだ。研究会終了後、会場近くの「清水家 NAGOMI」で懇親会を行い、参加者間の親睦をさらに深めることができた。研究発表者と発表題は次の通り。

桑原 久男（天理大学助教授）

「テル・レヘシュ第１次発掘調査」

2006 年３月に行われたテル・レヘシュでの発掘調査報告

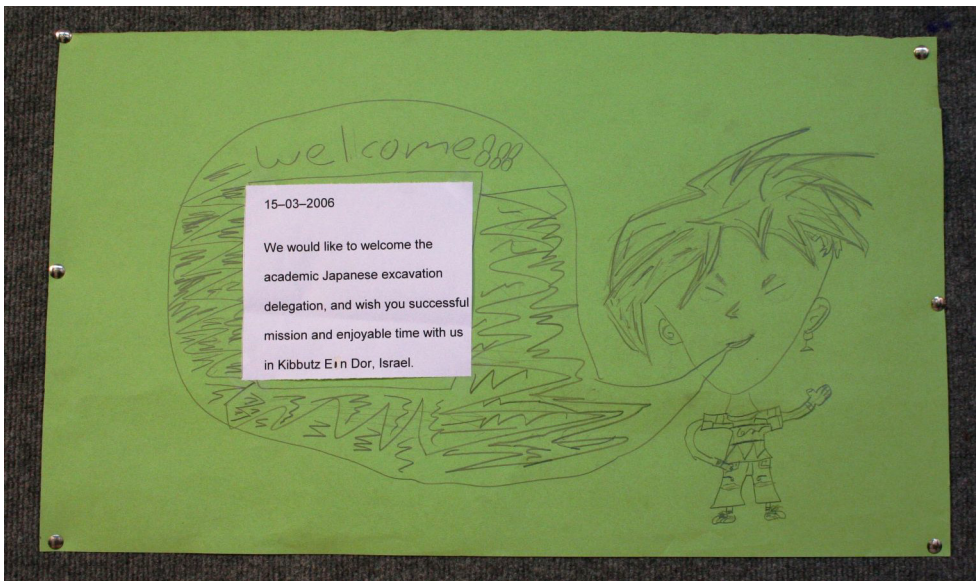
江添 誠（慶応大学大学院）

「デカポリス都市にみるヘレニズム・ローマ時代の層位について」

2006 年夏に参加したヒッポス（イスラエル）とウム・カイス（ヨルダン）での発掘調査報告

岡田 真弓（慶応大学大学院）

「発掘における保存修復について ── ビッポス遺



レヘシュ調査団が宿舎にしているキブツ・エンドルに掲げられていた歓迎の辞（2006 年３月）

跡の事例を通して ── 」
2006 年に参加したヒッポス発掘における遺構の保存修復についての報告
千巌 ふみ（同志社大学大学院）
「エルサレム、ダビデ王宮の再考」
エイラット・マザールによる発掘調査に基づいた、エルサレムにおけるダビデの王宮の場所について
越後屋 朗（同志社大学教授）
「エフド物語（士師記 3 章 12-30 節）解釈 ── 考古学の観点から ── 」（今号掲載）

（報告・越後屋朗）

第 6 回研究会の様子

第 5 回イスラエル考古学研究会 (2006.10.14)　発表要旨

エフド物語（士師記 3 章 12 − 30 節）解釈
──考古学の観点から──

越後屋　朗

エフド物語はヘブライ語聖書の士師記にある 12 の士師物語のうちのひとつである。神が立てた救助者であるエフドが策略を用いて、イスラエルを支配していたモアブの王エグロンを殺害し、それから 80 年にわたってイスラエルは平穏であった、という物語である。物語の内容は全体として理解しやすいが、ヘブライ語聖書中ここにしか現れない表現などがあり、細かなところまで正確に意味を捉えることはたいへん困難なテクストである。

この発表では考古学の観点からエフド物語を見るということで、エフドがエグロンを殺害した場所について取り上げる。殺害現場と関係する箇所を『聖書 新共同訳』（日本聖書協会）から引用する。

19 自ら（エフドのこと）はギルガルに近い偶像のあるところから引き返し、「王（モアブの王エグロンのこと）よ、内密の話がございます」と言った。王が、「黙れ」と言うと、そばにいた従臣たちは皆席をはずした。20 エフドは近づいたが、そのとき王は屋上にしつらえた涼しい部屋に座り、ただ一人になっていた。エフドが、「あなたへの神のお告げを持って来ました」と言うと、王は席から立ち上がった。21 エフドは左手で右腰の剣を抜き、王の腹を刺した。22 剣は刃からつかまでも刺さり、抜かずにおいたため脂肪が刃を閉じ込めてしまった。汚物が出てきていた。23 エフドは廊下に出たが、屋上にしつらえた部屋の戸は閉じて錠を下ろしておいた。24 彼が出て行った後、従臣たちが来て、屋上にしつらえた部屋の戸に錠がかかっているのを見、王は涼しいところで用を足しておられるのだと言い合った。25 待てるだけ待ったが、屋

上にしつらえた部屋の戸が開かないので、鍵を取って開けて見ると、彼らの主君は床に倒れて死んでいた。

テクストからエグロンの宮殿における殺害現場は屋上にしつらえた部屋で、その戸には錠をかけることができ、しかも部屋にはトイレがあったことがわかる。さらに、屋上にしつらえた部屋の前（階下）には謁見の間があったようである。

エグロンの宮殿を考察する上で参考となるのがビト・ヒラニ式宮殿である。この様式の特徴は柱のある玄関（小室）とそれにつながる、小さな部屋に囲まれた大きく、細長い部屋（王座の間）である。例えば、メギドにおける第 VA-IVB 層の 6000 番宮殿などが挙げられる（同じ層の 1723 番宮殿もビト・ヒラニ式宮殿の変形と見なされている）。このビト・ヒラニ式の宮殿をエグロンの宮殿と重ねると、「王が、『黙れ』と言うと、そばにいた従臣たちは皆席をはずした」という箇所は、従臣たちが大きく、細長い部屋である謁見の間（王座の間）から柱のある玄関（小室）へ出たと推測できるかもしれない。

エグロン殺害現場をビト・ヒラニ式宮殿と関連させ、さらに具体的な復元を試みたのが、ペンシルバニア州立大学のバルーク・ハルパーン（Baruch Halpern, *The First Historians: The Hebrew Bible and History* [San Francisco: Harper & Row, 1996], 39-75）である。彼は復元において、テクストの 23 節に注目する。ここで「廊下」（新共同訳）と訳されているヘブライ語「ミシュデローン」はヘブライ語聖書ではエフド物語にしか出てこない単語で、正確な意味はわかっていない。ハルパーンはこの語をヘブライ語、アラム語、アラビア語の語根との関連から「隠された場所」といった意味に取り、梁にしつらえた（彼によれば、「屋上にしつらえた」ではない）エグロンの部屋にあるトイレと結び付ける。さらにハルパーンは、新共同訳では表現されていないヘブライ

春のイスラエル

巽　善信

日本の調査隊が西アジアで長期に亘って調査する時は、大抵は夏である。大学関係者がほとんどなので、長期に海外で滞在するとなると夏休みを利用することになってしまうからだ。たまに春休みを利用して調査する時もある。厳暑で草も枯れる夏とは違い、春は気候が良く野花も咲き誇る。それなら春に調査すればいいではないかと思われるだろうが、問題もある。ちょうど雨期があけるかどうかという微妙な時期に当たる。雨が降れば発掘作業はできないので、長期に発掘調査を計画するにはあまり適さない。ただテル・レヘシュは春に縁がありそうだ。第 1 次調査は昨年の春に行われた。昨夏に本格的に調査をしようと計画していたら、ご存じの通りレバノン紛争で延期となった。どうやら今春に再開されそうだ。春のイスラエルはとてもきれいなので、また行けるのかなと思うと楽しみでもある。

私たち考古学に関係する者は特にそうだが、イスラエルに行くと、時間があれば遺跡を回る。撮る写真といえば遺跡や遺物ばかりである。マニアックな写真なので、関係者以外の人は、見せられてもあまり感動しない。ときたま写っている食事風景に反応するくらいのものである。ところが、春のイスラエルは野に咲く花が美しい。普通に咲いている雑草の花がまるで庭に植えた花のように美しい。日本の雑草もこんな綺麗な花を咲かせれば、まるで親の敵かのように憎しみを込めて抜かれることもないのになあ、なんてしみじみ思ってしまう。なので、皆花ばかり写真を撮ってしまう。まるでプロの写真家気取りで花をアップで撮ったり、崖に健気に咲く一輪の草花を撮る。最近はデジカメで、撮ったらすぐに見られるので、側にいる人に自慢げに見せてしまう。「うまく撮れていますね、個展でも開かれたらどうです？」なんて言い合うのもちょっとしたマナーである。

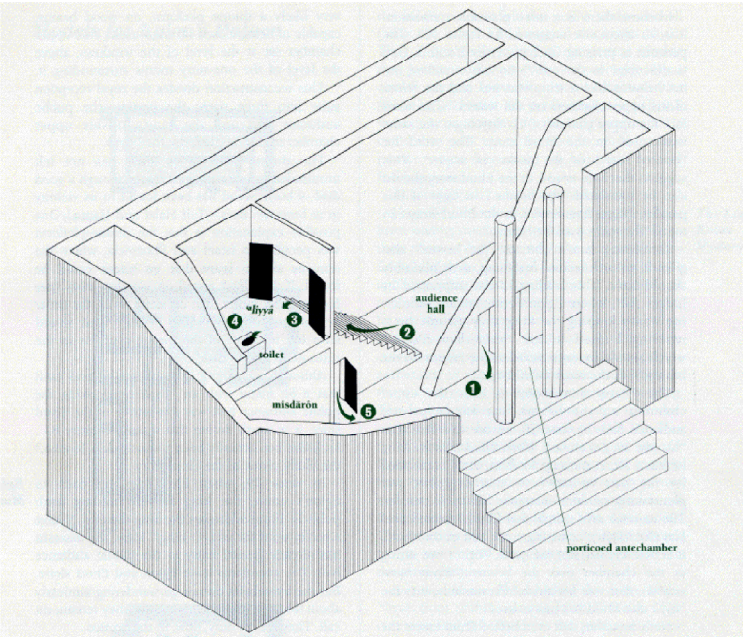
語の「バアドー」（前置詞バアド＋３人称男性単数の人称接尾辞）から、エフドは内側から部屋の戸に錠を下ろしたと解釈する（新共同訳では読者の混乱を避けるため、「バアドー」が訳されなかったのだろう）。つまり、エフドはエグロンを殺した後、殺害現場であるエグロンの部屋の戸に内側から錠を下ろし、部屋の中のトイレ（の穴）から人の目にふれない「隠された場所」へと出たというわけである。また、エグロンの部屋の錠が内側から下ろされていることから、エグロン殺害は従臣にとってまさに密室殺人事件となる。ハルパーンは具体的な殺害現場の復元図を提示しているので、紹介しておく（下図）。

このハルパーンによるエグロン殺害現場の復元は主に、エグロンの部屋にトイレがあること、ミシュデローンの意味が不明なこと、エグロンは部屋を出る際に内側から錠をおろしたことの３点に基づいている。そして、そこにビト・ヒラニ式宮殿の具体的なイメージが加えられているのである。ハルパーンの解釈では、エフドがエグロンを殺した後の、驚きの脱出が物語のクライマックスであると言えよう。

ハルパーンの解釈はひじょうに興味深いものであるが、問題とされるべき点もある。まず、ビト・ヒラニ式宮殿を参考にイメージしたとしても、これまで発掘されてきた遺構から上階部分の構造がはっきりしないため、殺害現場であるエグロンの部屋の周り（隣接する他の部屋など）に関する推測が十分にできないことである。したがって、ミシュデローンもトイレと関係するものではなく、別なものを意味する可能性がある。また、エフドが部屋の「内側から」戸に錠を下ろした、という主張も確定できない。動詞「閉じる」は前置詞「バアド」と一緒にヘブライ語聖書に士師記３章23節以外に９回出てくる（創世記７章16節、士師記３章22節、９章51節、サムエル記上１章６節、列王記下４章4、5、21、33節、イザヤ書26章20節）。他の箇所からも「内側から閉じた」という意味に理解できるが、ここで注意すべきは、士師記３章23節と構文上、並行な箇所が他にないことであり、そして何よりも、エフドが部屋の戸を閉じて錠を下ろす前に、ミシュデローンに出た、という記述があることである。「バアドー」は「内側から」という意味でないとするなら、「彼の後で」と解することが可能である。

結局、ハルパーンの解釈の根拠は十分に説得力のあるものではない。しかし、ビト・ヒラニ式宮殿をエグロンの宮殿のモデルとすることにより、エフド物語の解釈に新たな要素や視点を加えたことは確かである。聖書テクストの解釈において、考古学的データ活用の必要性と重要性をハルパーンの研究は示しているように思われる。

（同志社大学教授）



1 従臣、席をはずす。2 エフド、王に近づく。3 エフド、王エグロンの部屋に入り殺害。4 トイレの穴から脱出。5 清掃人の扉から外へ。（Baruch Halpern, “The Assassination of Eglon: The First Locked-Room Murder Mystery,” *Bible Review* IV/6 [1988], 37 より）

目　次

テル・レヘシュ第２次調査を
　　むかえるにあたって　置田 雅昭　1
第４，５回研究会・報告　2
エフド物語（士師記３章 12-30 節）解釈
　　――考古学の観点から――　越後屋 朗　3
春のイスラエル　巽　善信　4
レヘシュ調査団・メンバー短信　6
編集後記　6

〈レヘシュ調査団・メンバー短信〉

もう少しでテル・レヘシュ遺跡の第２次調査が始まります。テル・レヘシュ遺跡では他地域から運ばれてきた土器などの焼き物が出土します。すでにアマルナ文書には当時のレヘシュから発信されたのではないかとされる文書（土製タブレット）があり、当時のエジプトとの関係がわかってきています。さらに細かく理解するためにレヘシュ出土土器の胎土分析を行い、交易などの様子を知ることが大切です。分析を行う蛍光 X 線分析装置の購入をすすめるべく 2007 年度の科学研究費を申請しました。予算通りに申請が通れば第３次調査には現地へ機器を持ち込み、是非、分析を行いたいと考えています。（2007.1.21　山内紀嗣）

－　＊　－　＊　－　＊　－　＊　－

今、天理では最も美しい季節を迎えようとしています。天理大学と参考館も銀杏並木に囲まれ、晩秋には情趣あふれた景色が広がります。しかし、そんな紅葉シーズンの到来を横目に、科研申請の締め切りが刻々と近付いてきました。

初めて申請する私にとってはちょっとした大仕事です。参考館の収蔵するギリシア先史時代関連の資料調査とテル・レヘシュ調査をどう繋げるかが一番の課題でした。そこで必然と目に入ったのがペリシテ人の活動。彼らがミケーネ文化とイスラエルの鉄器時代初期文化を繋げてくれます。ギリシア暗黒時代の文化内容をイスラエルの地で見ることができるかもしれません。アシュドットやアシュケロンには是非一度足を運びたいです。（2006.10.31 飯降美子）

編集後記

○発行が遅れに遅れてしまい、年を越してしまった。言い訳になるが、少しでも良い内容にしようとした結果であることはご理解いただきたい。新たな試みとして紀行文、雑記を入れてみた。単なる連絡に終わることのないよう、今後も内容重視に努めていきたい。

○この間にイスラエル・レバノン紛争が勃発した。上空からイスラエルの戦闘機が爆撃し、地下に潜伏しているヒズボラがミサイルを発射した。誰と誰が戦っているのかその顔も姿も見えない状態で、地上で生活している庶民のたくさんの命が失われ、生活の基盤を奪われていった。日本は平和で何よりであるが、社会状況は異様である。異常と正常の境界を失い、加害者と被害者の区別も難しいような事件や事故が多発している。まるで目に見えない相手に真綿で首をゆっくり締め付けられていくような、息苦しさと閉塞感が漂う。

○イスラエル・レバノン紛争を遠くの国の出来事と思わないことである。戦争と平和の境界も失いつつあるのだから。この状況に身を置く者の一人として、苛立ちながらも凝視するしかない。（Y.T.）

イスラエル考古学研究会 ニュースレター　No. 3

2007 年２月５日

編　集：　巽 善信　　宮崎 修二

発　行：イスラエル考古学研究会

〒 632-8510

奈良県天理市杣之内町 1050 番地

天理大学文学部　考古学・民俗学共同研究室内

e-mail: israelkai@yahoo.co.jp

郵便振替口座

00960-3-79256　イスラエル考古学研究会